

日本における「中国文物」の受容変遷について

～日本型展覧会の成立とマスメディア～

小田部 英 勝

〔抄 録〕

日本文化は、古来より中国文化の強い影響を受けている。源流そのものに中国文化が存在している。その日本における中国への認識は、先史からもたらされている「文物」からの影響が大きい。本稿においては、永い権力層のみの独占物を経て、明治維新を契機とする近・現代の社会変革の中に一般化の潮流を確認する。そして、明治政府による美術概念の付与形成やその醸成とともに進む博覧会開催、博物館創設、売立、美術商の活躍、百貨店の隆盛などの動きと、マスメディアによる展覧会開催と中国政府の動きに注視する。中国文物の受容の機会の変遷を通じて、日本における中国認識とその機会を検証し、文物展覧の意義を考察する。

キーワード 美術概念、博物館創設、百貨店開催、メディア主催、中国文物展

はじめに

本稿においては、まず近代以前の日本における中国文物の受容の変遷を確認するとともに、時の権力層と不可分の関係として、文物が宝物として用いられて来た状況を見る。そして近代日本において文物は、新たな概念である美術品として位置づけられながらも、時の新興富裕層への移行が進む。さらに、国民経済の向上とマスコミュニケーションの発達が背景となり、中国文物の一般大衆への鑑賞の機会の増大を齎す。戦後の日中両国の国交回復後において、展覧会の開催は、日本人の間に蓄積する中国文物を通じての畏敬の念とも言うべき心情を基礎に、中国政府の外交戦略の有力な手法として活用される。実際の展覧会開催の事例を通して、新聞社に代表されるマスメディアと中国政府の動きを検証し、中国文物を巡るさらなる意識変遷と、一般化への過程をたどる。文物の持つ価値観の多面性を、時の権力層の意識、政治経済の環境、国民意識の形成面から考察する。

1. 「中国文物」を巡る状況とその認識

「唐物」「唐様」「唐物趣味」「三国渡」「天竺渡」「舶来品」等の語に象徴されるように日本人

の価値意識には、古来より先進的な文明を持つ海外からの諸物に対する憧憬から派生する渴望にも似た所有欲が存在し、これらを生活のあらゆる面に執り入れて、日本文化のうちに吸収し昇華して来たことは論を俟たない。なかでも「中国文物」の所有は、時の権力者層による権威や裕福さの象徴として意識され位置付けられるとともに、その受容と波及による影響は、今日に至る日本人の美意識や価値観の形成のみならず、精神形成にも深く影響していると言える。

わが国の古墳から出土する漢式鏡に代表される鏡鑑の存在は、現在では考古学上における最も重要なテーマ⁽¹⁾の一つとなっている。日本史上では天皇皇位の証として保持する三種の神器に八咫の鏡⁽²⁾が含まれているように、鏡鑑は権力継承の重要な役割を持つ⁽³⁾に至っている。六世紀前半において、仏教が仏像をともなって、朝鮮半島を経由しわが国へ齎された。これは、中国文物の本格的な日本への伝搬の幕開けである。さらに引き続く、遣唐使に従いともに渡海した多くの留学僧・留学生や工人達⁽⁴⁾の役割も大きかったことが想像される。彼等自身の学識・技能の深化向上とともに新たな理念や文物の将来は渡航目的の大きな要素であった。彼等が齎したであろう正倉院収蔵の祭祀具や調度品などは、唐代工藝の伝世品遺産として、世界工芸史上や文化交流史上でも特異な存在の極めて貴重な品々であり、多くの文化的な意義を内包している点で世界的にも高い意義⁽⁵⁾を持つ。また、十世紀初には入唐使による香料・薬物などの直接的購入の方途⁽⁶⁾も見られる。

十二世紀以降の宋・元の積極的な対外政策を反映し、日本へは中国文物が多量に流入する。平安貴族の生活文化にも多くの舶載品が取り入れられ、大きな影響⁽⁷⁾を及ぼしている。日本各地の集落遺跡からも中国製の陶磁器が発掘⁽⁸⁾されており、一定階層の人々が日常的に使用していたと考えられる状況も現れている。鎌倉期から南北朝・室町期にかけてのこれらの文物流入により、日本の美意識・工芸技術はその性格を一新する。鎌倉期には「当時鎌倉中茶以下唐物多々⁽⁹⁾」や「唐物は菓の他は皆無くとも事欠くまじ⁽¹⁰⁾」等の記載のほかには書状・文献・絵巻などにも見られるように、京や鎌倉を中心に多くの唐物が交易により流入した事実や一部識者からは憂慮⁽¹¹⁾されていたことが解る。そしてこれらの将来に大きな役割を果たしたのは禅宗の存在であり、その禅宗を庇護した足利幕府による新たな権威の象徴として唐物が珍重された。さらに文物とは言い難いが、鎌倉・足利時代を通じて宋銭の輸入も夥しく、この時期わが国の通貨は主として宋明の銅銭⁽¹²⁾による。これは、唐物の輸入の一面を物語っていて象徴的と言える。

足利義満、義教が集めた北山御物、足利義政が集めた東山御物には宋、元、明代の中国絵画や陶磁器、禅僧の墨蹟、雕漆等に代表される中国文物の一級品が豊富⁽¹³⁾に見られる。日本史上、権力層に宝器と目される中国文物への接触と蒐集の機会が最も顕著であったのは、この室町期において上流層で盛んであった茶会である。この茶会の形態は闘茶であり、広壮な会所に舶載の書画、調度、器物類を中国風の装飾法によってきらびやかに飾り立て、招客が集い、賭物をして茶の本非を喫み分けによる勝負を行い、茶事後には賭博、あるいは歌舞音曲に打ち興

じ、酒宴のうちに会を終わるという豪奢を極めた享樂的⁽¹⁴⁾なものであった。当時の公家と武家の両文化の融合の場と言えるこのような茶会において、舶載陶磁器を中心とする中国文物の多くが賞玩の対象となっていた。

その後の戦国期における武将の中でも豊臣秀吉は信長の後を受けて名代の数寄者として知られ数多くの茶会を催している。1587(天正15)年10月の北野大茶会⁽¹⁵⁾は最も名高い。当日、秀吉が所持する天下の名物を並べ群集の鑑賞に供した。この時公開された天下の名物は、唐物をはじめ高麗、呂宋、交趾、国焼などが陳列されたものと推察される。実に、この公開は日本史上において大衆レベルへの中国文物公開の嚆矢であったともいえる。また、信長・秀吉・家康にあっては、旗下の武将の戦功に対する論功行賞として、知行に替わり唐物茶器が用いられたことは良く知られる。

また、仏教經典・儒教・法律関係書・天文書・医学書など多くの分野の中国典籍が将来され、文化伝搬の媒体として活用されてきた。平安期九世紀後半(876~884年)にかけて大学頭藤原佐世がまとめた『日本国見在書目録⁽¹⁶⁾』には、四十分類、典籍1,579部16,790巻を収録しており、『隋書』経籍誌典籍3,127部、『旧唐書』経籍誌3,060部の記載と比較するに、当時既に中国国内に存在する文献典籍の約半数が日本に将来されていたことが推定される。特に『史記』については、唐代における写本(断簡ではあるが)の伝世する六点全部が日本にのみ存在する⁽¹⁷⁾と言われる。鎌倉期において、印刷本(宋版)となり渡来した南宋慶元刊の三史は、中国では早くから散逸したが、わが国では完本として受け継がれて国宝に指定⁽¹⁸⁾されている。

江戸期における鎖国政策下でも中国文物に対する憧れは高く、長崎からは染織品・漢方薬類・香木・砂糖・陶磁器などとともに書籍も流入し、それらの影響は頗る大きい。長崎奉行所の記録からは、1693(元禄6)年から1803(享和3)年の110年間に中国船43艘が来航し貿易を行い漢籍は4,871種が輸入されていた。江戸期に漢籍は、商業的な流過程によって商品として日中間の商人によって売買され、知識階級である大名家のみならず幕府によって購入されている。その伝搬時間も驚異的に短縮され、明代十七世紀前期においても僅か三年で日本に到着していた事例⁽¹⁹⁾がある。この様に江戸期における学問は書物からと言う伝統がある反面、実学的分野への関心は薄く、歴史的文化財への保護に対する国家的意識は特に存在しなかったと言ってもよい。文物に関する研究は在野における道楽であった。例外とも言えるのは十八世紀末における松平定信編集にかかる『集古十種⁽²⁰⁾』や萩藩により編纂された『防長古器考⁽²¹⁾』が有り、当時における宝器の具体例を示しており、その意義は大きい。

文物の流通に関しては、江戸初期に京都鹿苑寺金閣と相国寺(臨濟宗)の第九十五世住持を勤めた鳳林承章の日記『隔蓐記』(1635(寛永12)年~1668(寛文8)年分が現存)には、当時唐物屋、茶碗屋、道具屋、書画屋、骨董屋などと呼ばれた人々との交流が記され、宮中をはじめ公家、大名家、寺院などと絵師への口利きや鑑定などの交流の様が書き記されており、こうした商人層の活躍ぶりが窺える。こうした個人売りから発展し、店を構えての不特定の人々に

対する販売に発展する。さらに大衆市場とも言うべき道具市が開催され古画、古物が展示販売されるようになる。同時代に作成された書画については、1789（寛政初）年に京都東山において皆川淇園⁽²²⁾が会主となって「新書画展覧」が催され、今日の展覧会と同様の形式で実作品を観て購入する形式の嚆矢⁽²³⁾となった。

2. 近代日本における「展覧会」開催背景とその状況

（1）「中国文物」と美術

近代日本において中国文物や中国工藝を表現する概念の一つとして「中国美術」という言葉があり、さらに「日本美術」「東洋美術」「美術鑑賞」なる言葉も、現在では日常的に使用されている。現代中国においても「中国美術」「美術館」等の言葉は一般化している。この「美術」とは、現在では美の視覚的・空間的な表現を目指す芸術・絵画・彫刻・建築・工藝などを指し、含み、明治期には音楽・文学をも含んだ FINE ARTS の訳語⁽²⁴⁾と知られるが、近年の研究では、明治初（1868）年に西欧概念の翻訳語として誕生したことばであり、概念は極めて新しい日本語であり、新たな価値観⁽²⁵⁾である。さらに、美術は美術という制度ないしは美術の制度化とともに生起された。制度としての美術について北澤憲昭氏は、「美術」という翻訳概念によって在来の絵画や彫刻などの制作技術が統合され、また美術の在り方が展覧会、博物館、学校などを通じて体系化され、規範化され、一般化されることで、美術と非美術の境界が設定され、さらに、かかる規範への適応如何が制作物への評価を決定し、さらには、そのような規範が公認され、自発的に遵守され、反復され、伝承され、起源が忘却され、ついには規範の内面化が行われるといった事態＝態様、これを指す⁽²⁶⁾。」と述べており「美術」といった機構も概念をめぐる制度化として移植と整備が図られたとしている。従って「中国美術」や「東洋美術」の言葉とその概念も「日本美術」への相対概念として、十九世紀後半の対外的な世界観の中で設定されたものである。現代中国語の美術（MEISHU）の語は、明治期における日本語からの移植であり、概念についても同様であるとする考えが妥当である。

藝術工藝への美意識や物としての価値観についても、時代により変化し形成されてきた。特にこの明治初年には、祭政一致をスローガンとする明治政府の国家神道国教化策・神仏分離政策への傾斜から生れた廃仏棄釈（明治初年～5年頃）や西洋文物の流入とともに浸透した文明開化思想の影響により、それまでに培われてきた伝統的な日本文化や工藝品が捨て去られ、旧秩序の破壊と新たな統合へ向けての再秩序化が「美術」概念の構築と制度化において重要な役割を果たすこととなる。

1871年4月には「大学⁽²⁷⁾ 献言」において、博物館建設構想とも言うべき「集古館建設」に際して、その建設理由として「戊辰干戈ノ際以来、天下ノ宝器珍什ノ及遺失候モノ尙有之」や「只管厭旧尚新ノ弊風ヲ生シ経歳累世ノ古器旧物敗壞致候」との現状から「古器旧物」を蒐集

し「古今時勢ノ沿革ハ勿論小生往昔ノ制度文物ヲ考証仕候要務ニ有之」とし、「古器旧物」の語を用いてその目的を示している⁽²⁸⁾。さらに同年5月の太政官布告では、文明開化の動きと廃仏棄釈による文化財破壊への懸念から「古器舊物保存方」を布告し「古今時勢ノ変遷、制度、風俗ノ沿革ヲ考証シ候為メ」を文化財保存の意義としており、それらの「文物」を「古器舊物」と呼称している⁽²⁹⁾。また、翌72年における湯島聖堂大成殿における「文部省博覧会」の開催を告げる布達においても「就中古器旧物ニ至テハ時勢ノ推遷制度ノ沿革ヲ追徴ス可キ要物ナルニ因リ」と、博覧会開催における古器舊物の語とともにその展示意義を述べている⁽³⁰⁾。これらの事象は、当然ながら日本における中国文物も巻き込みながら美術品としての地位を形成してゆくことと成る。

(2) 近代における「中国文物」鑑賞と保有の機会

明治維新期の1869年における版籍奉還においては、東京在住の諸大名とその家臣は国元に引き払い、家財道具をはじめとする家産の処分が生起したが、参勤交代や国替等での経験もあり左程の混乱もなかったが、続いての71年7月、廃藩置県においては、旧大名藩知事が旧藩地から東京居住となり、いわゆる大名諸道具は大抵がその藩地や移転後の東京において二束三文で処分され、当時の道具市場には大名道具が溢れ出たといわれる⁽³¹⁾。このような社会情勢の中、71年10月、京都において三井八郎右衛門らの民間有志が京都府の後援を得て「第一回京都博覧会」の名称で開催されたものが博覧会の初めであったが、内容的には骨董会であった。また同年、名古屋においても博覧会が開催されているが、やはり古器旧物の展覧が主体であった。72年には、初めて官としての文部省が東京湯島聖堂大成殿において博物館を開設し、古器旧物の出品を主体とする博覧会を実施している。この文部省博覧会で注目されるのが、文部省布達に現れる「放観」と称された公開の思想である。「名を正し用を弁ずることにより人々の知見を広める。」という啓蒙への重要な手段であった。さらに74年には、内山下町の旧佐土原・中津両藩邸および島津装束屋敷の跡を利用した博物館で行われた博覧会で、古器旧物を中心とした展示が行われている。77年東京上野寛永寺本坊跡に特設し開催された「第一回内国勸業博覧会」では、日本における博物館建築の第一号としての美術館が設けられた。これは殖産興業を目的とする博覧会であり1903年までに五回開催されている。その展示品は、文明開化を反映し「洋画」の台頭が著しい。しかし、1880年には内務省博物局によって最初の官制美術展が「観古美術会」という名称で国粋的意識のもと日本画を中心とした視覚芸術に的をおいた催しが開催される。明治天皇は82年の第三回観古美術会を観覧された。この様に、明治維新を経て文明開化、西洋化が進む中で、明治政府による勸業政策や教育統制政策とも相俟っての美術概念の確立化の進展の中で、これらの藝術品への鑑賞機会が飛躍的に増大していく。さらに加え、幕末・明治初期における寺社開帳、見世物、興行、物産会などにみる物見遊山の娯楽意識に、啓蒙的な感化思想を加味した展覧が重なり、今日に繋がる美術への鑑賞意識の環境土壌が形成さ

れ受容されて行った⁽³²⁾と考えられる。

一方で、公的な鑑賞施設でもある国・公立の美術館・博物館は、戦前はそれ自体が少なく、国立では東京・京都・奈良の各帝室博物館。公立では東京府美術館（1926年創立）京都市美術館（1931年）大阪市立美術館（1936年）の3館を数えるのみである。これらの国・公立博物館の使命と目的は、殖産興業にありのちに古美術保護が加わった。その収集の中心は、日本美術とともに西洋美術が中核となって構成されており、中国文物への鑑賞機会は限られていた。

近代資本主義の発展の中で、江戸期において権力層であった旧大名は、様々な理由で経済的な試練を受けた。旧華族による財産処分方法の一つとして特徴的な方法が、收藏する家宝とも言うべき中国文物を多く含む伝世の書画・工芸品等の「売立」と呼ぶ入札方法で売却する方法であった。都守淳夫氏⁽³³⁾の調査によれば、入札のための「売立目録」の現存数は4,335種冊、年代が判明しているもので1904年から95年までの92年間に及ぶ。これらの売立の人々は、旧皇族、華族以外の実業家、政治家や数奇者、歌舞伎役者などである。うち旧大名や爵位の位階表記が有った目録は202冊あり、旧大名15、公爵7、侯爵14、伯爵28、子爵83、男爵55の各冊であった。売立の状況は16年から41年までは毎年ほぼ100回の売立が有り、最高回数としては34年の年間163回である。この様な組織的・定期的な売立環境と技術進歩による目録＝印刷図録によって公開され、先祖伝来の宝器が継続的に供給される結果となった。これらの文物に対する価値評価基準は、当時爆発的に流行した煎茶や抹茶に代表される茶道や茶席へ使用した数寄のものと言われた人々による評価設定が大きい。またこの時期には、中国への列強勢力の侵略や清朝崩壊に伴う混乱から発生した文物流入を窺わせる売立目録例も多数存在⁽³⁴⁾する。一例としては32年「世界古美術展覧会⁽³⁵⁾」において、中国文物の周代「青銅器壘」、秦代「鏡」、隋代「菩薩像」、吐魯蕃・敦煌出土の「佛説十王経図」「彩色美人画断片」「木彫彩色武官」など、中国からの近現代における流出文物と推定できる物が含まれている。これらの売立・入札の多くが、07年創業の東京美術倶楽部をはじめ京都・大阪・名古屋・金沢の各地美術倶楽部で分散し開催された。札元は、当時の多数の有力美術商であり売立を支えた⁽³⁶⁾。

また、戦後の占領期には、「シャープ勧告」に基づく富裕税の創始により、その支払捻出のため多くの家宝（＝美術品類）が換金され市場に流入する⁽³⁷⁾。

3. 日本における「展覧会」開催とその状況

（1）「展覧会」の実施と一般化の契機

明治維新後、日本の産業界発展の契機となったのは日清・日露・第一次大戦など東アジアを舞台にした日本が関係する戦争の影響が大きく、またその勝利による果実としての満州進出である。その結果齎された経済活況は、商業・文化面においても加速された。中でも一つの契機となったのが1904年の「三越呉服店⁽³⁸⁾」の開店である。07年には新店舗の開店に併せて新た

に美術部を設け、常設陳列場に大家・新進の絵画・工芸品を並べ正札販売を開始し、開放的な商法を導入しとかく近寄りがたかった美術市場を大衆に開く契機を作った。一方で1898年大阪に開店の「高島屋呉服店⁽³⁹⁾」では、1909年「百幅画会」が販売を目的としない美術展覧会として創めて開催される。この好評を基に11年には美術部を創設、展覧会形式による当代の和・洋・彫刻・工藝・陶芸・外国人絵画を中心とした個展や各画家への直接依頼により販路拡大を図っている。33年には東京店開設に併せて東京美術部を設け、積極的な販売展開を行った。当時の百貨店による中国文物販売の一例としては、34年の大阪「阪急百貨店⁽⁴⁰⁾」新館八階會堂で開催(2月21日～27日)の「東洋藝術展覧會」が有る。その図録には、出展の中国文物として青銅器6点、銅器2点、佛像9点、俑5点、陶磁器15点、高麗石彫5点、その他4点の写真図版を掲載し、「其他數千餘點略之」と締め括っている。またその巻頭には、当時の中国文物の流通状況とともに中国文物に対する一般の関心と興味を窺わせる内容が巻頭言として記載されている⁽⁴¹⁾。

戦後の52年には、高島屋東京店は増築により専門会場を設け、大規模な内外の美術展覧会が開催された。これらの催しは、多数の顧客を動員し東京においてこの時期少なかった美術鑑賞施設の先駆的役割を果たしている。三越と高島屋の両店に代表される美術部の販売成功と美術展覧会の鑑賞者集客力は、その他の大規模百貨店等が追随するところとなった⁽⁴²⁾。そしてこれらの環境が、世界でも稀な日本的な特徴とも言える実施形式である「百貨店における開催⁽⁴³⁾」と「マスメディア主催」による美術展覧会を実施する上での土壌となった⁽⁴⁴⁾。

(2) 日本型展覧会の成立とマスメディア

ここで展覧会の開催を含む事業催事の目的を、マスメディアの主体である新聞社側の視点から見るに、第1義的には、新聞社の使命として文化活動を捉えており、国民啓蒙を標榜している。さらに、経営的な視点からも、自社のイメージアップによる部数の拡張と広告の集稿拡大を挙げている。新聞社による事業催事の領域への関与は幅広い。

朝日新聞社を例にとると、社業としては文化企画事業に分類される。展覧会開催のみではなく、他に表彰事業として、同社創刊50周年記念事業として1929年に創設された朝日賞(科学、藝術、スポーツ、航空、その他各方面に偉大なる功績ある人々の業績をひろく顕彰する目的)から始まり、発展的に拡大し、75年からは朝日賞、朝日社会福祉賞、朝日体育賞の三賞として文化全般を対象としている。学術奨励は、創刊70周年記念事業として49年に創始され朝日科学奨励金(健全な文化国家の建設に寄与するため。自然科学の基礎的研究および応用に優れた業績をあげた個人、団体を対象とする)、63年には人文科学を含め朝日学術奨励金と改称、74年には学際研究まで対象を拡大したが、88年を最後に打ち切られている。その規模は、49年から89年までに計345件総額3億7686万円に達する。文化事業としては、明治・大正期における懸賞小説募集(05年)講演会開催(08・09年)をはじめ、音楽会(23年)・演劇(27年)を嚆矢

として、和洋の多岐の分野に亘り数多くの公演を行なう。そして主な展覧会として、19年の「アジャントー壁画模写展」を始め、「明治大正名作展」（27年、東京府美術館⁽⁴⁵⁾）「天平文化記念事業」（28年⁽⁴⁶⁾）など大正末期から昭和初期にかけて多彩なジャンルでの展覧会開催に主体的に関与している⁽⁴⁷⁾。また、博覧会と称する産業化学系の催事や軍事的、時事的内容の催事、コンクール⁽⁴⁸⁾も行なわれている⁽⁴⁹⁾。

毎日新聞社においては、新聞社の事業は、新聞のイメージを高め、人々に新聞の名を知らしめ、親近感を抱かせるなど、本業である新聞の発行を助け、また販売を推進することを目標としている。そして新聞事業が、私企業でありながら公器といわれ、高度な精神文化の所産であり、国論を指向し、世論をまとめる機能を持ち、これを大きな使命とする以上、自ずから全く社会の繁栄に尽くし、文化的な所産を後世に残すということも事業であるという。その新聞発行で得た利益を、この様な形で社会に還元することは公器である新聞の使命であるとし、その事業内容を、1、学芸・文化事業ならびに社会的な啓蒙運動 2、音楽、美術、書道などの芸術活動 3、スポーツ、レジャー、娯乐的なものと分類している⁽⁵⁰⁾。23年には、日本画壇の諸派の第一線画家の傑作を集め「日本美術展覧会」を開催。関東大震災後の11月京都、翌1月大阪、2月東京は盛会で1日平均1万2千人の入場者を記録し空前の大成功といわれた。戦後も寺宝展や国際美術展をはじめ、58年1月には中国敦煌藝術展を開催、4月には65名の中国歌舞団を招請し全国主要都市で公演をしている⁽⁵¹⁾。

読売新聞社をみるに、その事業については新聞社という社会的な機能の中で、新聞社だからこそ出来る企画とその実施を理念として掲げている。具体的には自社のイメージアップ、読者サービス（社会への貢献）、部数の拡張と広告の集稿を大別し、「よい紙面、よい事業」が新聞の発展につながるの考えを持つ。社主であった正力松太郎は、新聞事業で上げた利益を社会的、文化的に意義ある事業に還元し、内外の文化向上に貢献することを真意としていた。その文化事業の中心には、絵画展や音楽会を据え年間平均四十件を開催している。また、82年には、全国の公立美術館に呼びかけ美術館連絡協議会を発足。94年には80館が参加し、地方美術館における展覧会企画の充実、巡回展のあっせん実施、学芸員の資質向上のための海外研修派遣・研究助成を主眼として活動する。本活動には文化活動に熱意を持つ民間企業（花王^(株)）が資金面の援助を行っている。92年までの10年間で巡回展164件・511会場、学芸員の海外派遣51人、研究助成は48人を数える。その他には、大型公募展である読売書法会の開催がある⁽⁵²⁾。同社活動の特徴は、広告と販売の連携に有り、文化活動を核にする広告支援事業として商品化するとともに、メディアミックスとして日本テレビをはじめとする読売グループを含めた事業として成立を図っている⁽⁵³⁾。

日本経済新聞社をみるに、同社は新聞発行以来各種の事業活動に力を注いでいるとし、昭和56年に始まった美術展の開催が高い評価を得たとする。なかでも「中国殷周銅器展」（58年）「中国古代彫刻展」（59年）「中国名陶百選展」（60年）を目立った展覧会として挙げている。80

年代には、中国、旧東独、旧ソ連といった社会主義国からの美術展を多く招聘している⁽⁵⁴⁾。

諸外国のマスメディアの事例を見るに、経営における収益事業として催事を加えているケースは稀であり、特に美術展や文物展などの展覧会事業において、「主催」として実施責任の主体として位置することはほとんど無い。例外的とも言える事例としては、イギリス『THE TIMES』が、1974年 Royal Academy で開催された「The Genius Of China」展における後援 (sponsorship) を嚆矢とし、1996・97年大英博物館で開催された中国文物展「Mysteries Of Ancient China-New Discoveries From The Early Dynasties-」展においてスポンサード (Exhibition Sponsored by) として大きく明記している。また同じく大英博物館において1999・2000年にかけて開催された「Gilded Dragons-Buried Treasures From Chinas Golden Age-」展においても PRUDENTIAL (英国保城保険) とともにスポンサードしている。なお同展の開幕式典にはエリザベス女王、江澤民主席が列席している。アメリカにおいて開催された中国文物展においては、一部の地方開催の際におけるローカル紙のスポンサード事例が例外的に認められる程度である。

以上のように、日本の大新聞社では、その会社の経営事業の一環として「文化・啓蒙」を掲げ、「展覧会」の主体的な企画・運営にあたっている。これは購読者に対して、紙面による展覧会の内容紹介とともに関連する文化領域への知識拡大、展覧会を実現することによる実物への接触機会の設定といった面からも、国民文化のうえでは大いに寄与貢献していると言えよう。しかしながら反面では、これらの展覧会への鑑賞者拡大は、経営数字に反映する興行としての側面もあるために、鑑賞者＝読者への働きかけが過剰となる傾向や、展覧会内容や出展作品への否定的な見解や評価は、紙面に反映されなくなる。また、他紙が開催する事業に対しては、その内容・意義を問わず殆ど紹介されることが無いのが実情である。世界的にも希なマスメディアによる展覧会主催は、社会の木鐸としての背後には収益事業が存在するのである。

(3) 戦後の主たる展覧会開催と中国文物公開

展覧会の内容に眼を転ずるに、1951年には寺宝展第1号として日本橋三越を会場とする「奈良薬師寺東塔水煙展」(毎日新聞社ほか主催)が行われ国宝「吉祥天画像」他50余点が公開された。寺宝の出展品の中には少なからぬ数の中国文物が存在している。以降の寺宝展のみを採り上げてみるに翌52年には「奈良春日興福寺国宝展」、20日間余りの開催に65万人の来場を見た「国宝法隆寺展」(いずれも毎日ほか主催、日本橋三越)、「東大寺展」(朝日新聞社ほか主催、高島屋)など4件、53年には「大徳寺名宝展」(朝日ほか主催、銀座松屋)など6件、54年には「近江三井寺秘宝展観」(朝日ほか主催、高島屋)、「比叡山名宝展」(朝日ほか主催、大丸)など5件が開催された。さらに55年には、高島屋において「宋磁名品展」がアメリカクリーブランド美術館からの出展品と国内所蔵品を合わせて141点によって構成され開催された。翌56年には同じく高島屋で「中国陶磁・元・明名品展覧会」(毎日後援)が340点もの国内所蔵品によ

り構成され、共に日本陶磁協会主催による世界の陶磁器の最高峰に位置する中国陶磁の源流に迫ろうとする意図を持った展覧会であった。両展の開催は、後の茶物を中心とした焼物展で高島屋が他店をリードするきっかけとなった。58年に「中国殷周銅器展覧会」が、国内所蔵品とボストン・カンサスシティ、ネルソンなど米英美術館からの青銅器・玉器・銀器など総計二百数十点で構成され、日本経済新聞社主催により高島屋で開催されている。59年4月には、同じく日経・高島屋により「中国古代彫刻展覧会」が開催され、南北朝・隋・唐の彫刻を主題とした青銅・塑像・石像・陶像など国内収蔵品132点で構成された。同年10月には、京都国立博物館において「隋・唐の美術展」が開催され、戦後中国各地で行った発掘調査の成果を踏まえながら、我国に伝世されてきた書画・彫刻・金工・染織など433点の文物のみでこれを補い、新たな視点で見直し構成された。62年には、「池袋東武百貨店」開店を記念して同じ資本系列の根津美術館蔵の伝牧谿筆「漁村夕照図」など重文42点を含む約450点を展出して「根津美術館展」を開催し、新たな仮設美術館として加わった。61年には東京国立博物館では「宋元美術展」、63年には「明清美術展」、68年には東京国立博物館東洋館開館記念として「東洋美術展」が開催され、館蔵品をはじめ国内所蔵家やインドニューデリー州立博物館からの出展もあり吐魯蕃出土「樹下人物図」を含めて1千点を越す展示品で構成された。また同年には同館と新聞社が共催した最初のケースとして「法隆寺展」が開催されている。これは朝日新聞社が焼失した法隆寺金堂壁画復原に協力して完成したお披露目展であった。新聞社の文化活動とその成果発表の場と国立博物館での公開が結び付いた事例として、以降の企画展実施への嚆矢となった。70年(3月15日～9月13日)には、日本万国博覧会(大阪万博)に付随して会場内美術館(その後の77年10月「国立国際美術館」として転用開館の後、2004年大阪中之島に移転)において「万国博美術展」が行われた。展示構想は縦軸に日本を中心とした東洋美術の史的展開、横軸には縦軸にかかわる東西美術の対比・展開・調和・融合する様々の姿をとった。常時500点の展示で期間中の展示替えて海外収蔵先は約100機関、732点の作品が集められ、6ヶ月間の会期に178万人が入場した。正に国を挙げての取組に相応しく展示内容の質・量、展示テーマの壮大さは「世界に稀な美術展」の評価を得た。この展示には、当時国交があった「台北故宮博物院」から優品の出展の協力を得ている。同年4月には、安宅コレクションの公開として「東洋陶磁名品展」(日経主催、高島屋)が開催され、中国37点と朝鮮127点の構成で国宝・重文を含む展示であった。またさらに、同年10月には東京国立博物館において「東洋陶磁展」が開催され、海外博物館⁽⁵⁵⁾と個人収蔵を含め中国150点・朝鮮53点・日本134点の計337点が会し、約10万人の参観を得た。71年4月には三越での「薬師寺展」で、これまで不出の国宝「月光菩薩像」をはじめ20点もの仏像・寺宝が公開された。なお、百貨店展覧会は65年⁽⁵⁶⁾ごろより、それまでの利益の顧客還元思考から、経費増大を理由として入場の有料化がすすむ。一方で、百貨店内展示施設は、75年池袋西武(89年にはセゾン美術館として新装)、77年日本橋三越(91年には新宿店に本格的美術館を開設)、79年には伊勢丹がこれまでの仮設美術館を常設美術

館化して、高級店イメージの演出として活用することになる⁽⁵⁷⁾。

以上のように国交回復前における中国文物を主題とする企画展の開催実績を見るに、国内所蔵の中国文物のみで構成し得るほどに多くの良質で多数の作品が我国に蓄積存在し、かつこれらの展覧会が興行面においても成立し得たことの証左であり、日本中国の国交回復による本格的な中国文物招請による展覧会開催への地均しとなっていたと考えられる。さらに国別に見た場合の展覧会の開催件数を見ても、戦後45年間を通してフランス139件に並ぶ中国135件と2番目の件数を記録しており開催回数は目立って多い⁽⁵⁸⁾。

またさらに特筆すべき点は、美術が技藝と区別され藝術の領域として文化欲求として自覚されるなど、近代以降においてその取り巻く環境が大きく変化した点である。それは美術を不特定多数の人々が鑑賞するようになったことであり、この環境の構築には新聞に代表されるマスメディアとともに、近代の物質文明の殿堂ともいえる人々の欲求が集約される商業施設である百貨店での開催との結び付きが大きく、美術鑑賞へのさらなる一般化・大衆化を拡大再生産していき、より一層の文化受容への影響力が増していったと考えられる⁽⁵⁹⁾。その延長線上に中国文物受容を契機とした、中国文化への理解傾斜が見て取れる。しかしながら、1990年代の長期にわたる不況は大規模小売商店である百貨店にも及び、東武、西武セゾン、三越、伊勢丹など常設美術館を閉鎖する有力百貨店が相次ぎ、今後の美術領域における鑑賞機会が失われるとともに、これまでに百貨店が築き上げてきた文化領域での成果の喪失が懸念される。

(4) 日本政府の展覧会への認識と関与

戦後の美術行政は、日本政府の国家予算面からは全く重要視されていない。49年には、日本美術家連盟が世界各国の中でも大きく立ち遅れている美術館建設（当時全世界に合計6,036館存在し米国869館、日本36館の16位）の必要性を訴えたが、政府は「国立近代美術館」（京橋）建設費3億円を1億円に削減し、52年にも、政府はイタリアヴェネチア・ビエンナーレからの出展要請を無視した⁽⁶⁰⁾。また、69年に至ってもなお「国立近代美術館」（北の丸公園）新築移転に際して資金を確保しなかった⁽⁶¹⁾。美術館というハードばかりではない。日本国政府が直接的主体的に関与し、また予算処置を講じて実施する展覧会は、大阪万国博覧会、愛知万国博覧会の両会場での開催を例外的として、中国文物展の事例においては管見の及ぶ限りは殆ど見られない。日本国内において展覧会は、行政上は文化庁（66年6月文部省外局として発足）が担当であり、開催にあたっては「後援」という精神的な名義支援が一般的である。海外へ支払う出展借用料・クーリエ日当をも課税対象である。73年11月に発生した熊本大洋デパート火災を機に、翌年1月に文化庁による国宝・重要文化財などの指定物件の「デパート等臨時公開施設における国宝重要文化財の公開禁止に関する通達」など、文化財保護の見地からの規制面での影響力を高めている。

4. 国交正常化後における「中国文物展」とマスメディア関与

（1）「中華人民共和国出土文物展」の開催

1972年、田中角栄首相による衝撃的な中国訪問に続く日本中国間の国交回復実現は、中国政府の指名により「朝日新聞社」が主催社として、国交正常化後初の「中国文物展」（開催名「中華人民共和国出土文物展」）の開催を実現させた。この背景には70年の同社社長・編集局長の中国訪問、71年のピンポン外交への側面援助などが効を奏しており、朝日新聞社はその使命を日中国交正常化に置き、展覧会実現に向け全社的に取り組んでいる。73年に朝日新聞社主催により日中国交正常化記念を謳い、国立東京博物館で開催された。隣接する上野動物園では「パンダ」が公開されている。国交回復後に続く中国文物展におけるマスメディア主催する開催形態の嚆矢となった。図録巻頭挨拶は、田中角栄首相・陳楚初代駐日中国大使および知日派と知られた郭沫若氏である。出展内容は前年発掘された湖南省長沙「馬王堆漢墓出土軀侯夫人衣裝」や徐州後漢墓「銀縷玉衣」、春秋期蔡侯墓出土青銅器など漢・唐代の発掘品を中心として15グループ236点を提供している。東京展開催期間中（6月9日～7月29日）の総入場者約43万人であった⁽⁶²⁾。その後は、中国政府はほぼ3年おきに中国文物展を許可し、76年には「中華人民共和国古代青銅器展」（国立東京博物館、日本経済新聞社）、79年には「中華人民共和国シルクロード展」（国立東京博物館、読売新聞社）と、主催新聞社との出展契約を巧みに分散しながら展覧会を実施している。

これらの「中国文物展」開催の目的は、多くが第一義としては日本中国の両国友好交流としており、文物を通じての文化交流を挙げている。しかしその開催形態の多くは、国家の主導ではなく言論機関としての「新聞社」「テレビ局」が主催者となり、主体的な役割を果たすなど、マスメディア主導型によるいわば日本型ともいえる世界的にも稀有な開催形態であると言える。またさらに、80年代の高度成長期における1県1美術館建設ともいえる箱物行政や有力企業による美術館開設も、美術企画展全般における催行への大きな機会を生み出している。日中国交回復後には、開催地の拡大、開催期間の長期化、観客数の増大などの傾向を反映して、中国文物展を含めた海外作品を積極的に将来しての企画展は、こうした大型施設での開催事例が進む。

（2）主要な中国文物展の開催事例

その開催内容から、主催者の一端がメディアであり、国際的レベルに達する出展文物内容・点数、実施状況であり、展覧会開催の実現に積極的に係わった事例を例示する。

1) 「中国秦・兵馬俑展」（主催：読売新聞社ほか）

日中平和友好条約締結5周年ならびに大阪築城400周年を記念して、83年大阪城博覧会開催会場内の特設展示施設で開催され61日間約140万人という空前の入場者を数えた、20世紀考古

学の世紀の発見といわれる秦始皇陵兵馬俑坑からの「兵馬俑」を主体とする秦代出土品 (36点) が出展された。陝西省文物局が主体のため兵馬俑の大量出展が実現した。日本側の民間企業 (広告会社) との協調による世界初の海外展覧会であり、その後の「兵馬俑」人気の契機ともなった。主催を朝日新聞社と読売新聞社との間で争ったが、中国側の指定により読売と決まった。また、観客による兵馬俑破損事件が発生し、文物保護・補修・補償問題等の問題が生じた。收拾策として中曽根康弘首相および松下幸之助会長の謝罪文を中国主席宛へ持参し、補償額1億円の提供と損傷した兵馬俑を完全修復し返却するなどの処置を講じている。大阪・静岡に続く第3会場の東京展「古代オリエン特博物館」では、約25万人 (1日当り4534人) と同館では空前の入場者記録を達成した。図録巻頭挨拶は (財) 大阪21世紀協会会長松下幸之助、内閣総理大臣中曽根康弘、中華人民共和国国務院総理趙紫陽、文化部長朱穆之、文化庁長官鈴木勲、中国駐日特命全権大使宋之光の各氏であり多彩な顔ぶれである。大阪・福岡・東京・静岡で開催 (83年10月1日～84年5月12日)。総計約200万人を動員⁽⁶³⁾。

2) 「秦の始皇帝とその時代展」 (主催: 日本放送協会 (NHK) ほか)

東京世田谷美術館を皮切りに名古屋・神戸 (阪神大震災で中止)・福岡・松山・札幌の全国5都市で開催 (94年9月～95年8月) された。発掘が進む陝西省臨潼県「秦始皇兵馬俑博物館・2号坑」の本格的な発掘に連動して開催された。出展品は122点補助展品7点の計129点であった。主催者のNHKは、民間企業 (広告会社) からの企画提案を採用し、本展において初めて展覧会・テレビ番組放送・出版・シンポジウム開催からなるメディアミックス企画を採用し、2号坑発掘現場の独占取材・放送権取得と合わせて、番組広報を多用し観客の動員を行った。以降のNHK主催展覧会における開催形式の嚆矢となった。図録巻頭挨拶は中国国家文物局長。天皇皇后両陛下が御鑑賞された。東京展総入場者数は約34万人⁽⁶⁴⁾。

3) 「三星堆展」 (主催: 朝日新聞社ほか)

東京世田谷美術館を皮切りに京都・福岡・広島 of 4都市で開催 (98年4月～12月) された。黄河中流域に殷 (商)・周のみが栄えたとするこれまでの考古学の常識を覆し、86年四川省広漢市で発掘され、長江流域に古代文明が存在したことを窺わせる事実を明らかにした、世界で初めての総合的な三星堆出土品による文物展であり、国際的に大きな話題となった。出展品は、青銅器・玉器を中心とする全188点。図録序文として中国国家文物局長、祝辞は四川省文化庁副長官 (四川省文物局長) である。本展は、主催の朝日新聞社創刊120周年、テレビ朝日開局40周年の創立記念事業企画として「中国文物展」が初めて採用された。会期中には天皇皇后両陛下の御鑑賞があった。第1会場東京展総入場者数約21万人⁽⁶⁵⁾。

4) 「法門寺展」 (正式名称「唐皇帝からの贈り物展」) (主催: 新潟日報、朝日新聞社ほか)

新潟県立近代美術館 (長岡市) をはじめとして東京・山口萩・大阪の全国4都市で開催 (99年9月～00年7月) された。「中国文物展」としての全国巡回が地方都市から開始される例は珍しい。同県が朱鷺を通じて培った陝西省との友好交流の一環として開催された。日本の地方

自治体と中国の省政府との合意による文物展の実施であり、新潟県の新聞・テレビの全マスメディアが主催に加わり協力した。展覧会の内容的にも、唐代末期における皇帝と佛教信仰との密接な係わりを証明する金銀器や陶磁器の優れた一級品文物が世界初の一括出展で公開された。法門寺地下壇宮から出土の唐皇帝寄進文物を中心とした出展品全120件組総点数は150点を越える。第1会場の新潟（長岡）展総入場者数約6万人強を数えた⁽⁶⁶⁾。

5) 「世界四大文明展・中国文明展」（主催：日本放送協会（NHK）ほか）

「世界四大文明展」（エジプト・メソポタミア・インダス・黄河）の中の一つ「中国文明展」として開催された。他の文明展が採用した時代範囲を大幅に拡大し、唐代にまで及んだ出展対象文物と近年の発掘研究成果を反映して従来の黄河文明を採用せずに中国文明としている点に特徴がある。横浜美術館をはじめとして仙台・石川・香川・広島の5会場において開催（00年8月～01年6月）され、横浜会場では総入場者数約42万人を記録。出展に際しては、中国北京をはじめ11省1自治区・35機関にも及ぶ文物機関が協力した。多彩な120件の文物の中でも小品ながら陝西省から出展された唐代墓壁画3点は海外出展初であり、日本の高松塚古墳やキトラ古墳壁画との比較において貴重な鑑賞機会を提供している。公共放送NHKは総合・教育をはじめラジオ第1や英語版国際放送（短波）まで利用し、番組制作・放送やミニ番組や告知を挿入して、これまでには見られない徹底的な告知宣伝を繰り返した⁽⁶⁷⁾。

6) 「中国国宝展」（主催：朝日新聞社ほか）

00年10月～12月まで東京国立博物館においてのみで開催された。中国建国五十周年にあたり、中国側の海外出展に伴う自主規制（一級文物の割合）を大幅に緩和した160件組の出展文物内容により構成されている。最新発掘文物が主体であり日本初見の佛像群など出展作品のレベルは全般的に高かった。新石器時代から五代の時代範囲に分けての展示形式であった。出展構成内容は、前月までアメリカにおいて開催されていた「The Golden Age of Chinese Archaeology」展の出展品が主体である。中国国内には「国宝」指定制度がないため（“一級文物”の指定に近い）「国宝の無い国宝展」と揶揄されながらも、主催の朝日新聞社の報道効果もあり入場者数約39万人余を記録した。図録巻頭挨拶は、中国国家文物局長、東京国立博物館長、(社)日中友好協会会長、朝日新聞社代表取締役社長が占める。会期中には天皇皇后両陛下の御鑑賞を得た⁽⁶⁸⁾。

7) 「2005年日本国際博覧会日本政府主催テーマ館グローバルハウス中国文物展」

本展は、マスコミの単独主催ではないが、万博会場での開催であったため地元紙をはじめ中央各紙が積極的に報道した。愛知万博会場内日本政府主催テーマ館「グローバルハウス」において出展公開（05年3月25日～9月25日）された。日本政府は、2010年開催が決定した「上海国際博覧会」支援を目的の一つに挙げて、当時の中国国内の反日運動に対する対応策の一つとして政府特別予算を組んで実施がはかられた。政府予算によるこの種の展覧会開催は極めて稀な事例である。全出展品は僅かに10点であったが、出展文物は全て一級文物（国宝級）であり、

従来の国家文物局のみの出境許可決裁から、國務委員全員の決裁が必要となった。出展品のうち「唐代壁画(新・馬球図)」は世界最大級の大きさ(305×130cm)であり、前年6月に新発見発掘されたものが、僅か6ヶ月間の修復作業期間で完了し世界初公開された。会期中には天皇皇后両陛下、皇太子皇子ご夫妻、各皇族の御鑑賞があった。また、開催の前年にその存在が明らか(2004年10月)にされた「遣唐使留学生井真成墓誌」の初めての展示が行なわれた。本墓誌の出展に際しては、中国共産党教宣部門が政治的効果の追及を狙ったため一時保留されたが、日本側の積極的な働きかけにより出展が実現したが、本来の公開を前に中国館で、来日する呉儀副首相に合わせて10日間余りの事前公開が行われた⁽⁶⁹⁾。国際博覧会の場において、日本政府が間接的に関与した極めて政治性が高い展覧会であった点が特筆される。

むすびにかえて

日本において中国文物は、古来より文化先進国である中国からの舶載・将来品である希少性から、その多くが宝物として位置付け認識され、主として権力層による賞玩に独占されてきた。ところが明治初期の西洋文明への傾斜から、政府はこれまでの古器・古玩などの呼称の外に、新たな言語として明治初年に「美術」という官製翻訳語を作り、その概念の普及とともに広く社会的システムとしての美術概念構築と認識形成の確立を進めていった。これは発生的には西洋文明やその藝術を対象としていたが、結果として次第に日本や中国その他の国々の藝術・工藝にも演繹され、中国を対象として中国文物＝中国美術との認識が形成され受容されて、これに繋がっていった。この様な環境構築が進む歴史背景の中で、中国文物の大量流出の事態が起き、日本への流入にも繋がり多くの戦前の著名コレクションが形成され、鑑賞機会が拡大していく。

戦後の日中国交回復以降における「中国文物展」は、中国側からの開催意図では「文化交流としての外交戦略」としての目的的な認識が強く、宝物としての提供意識が色濃く存在する。一方、日本における開催の推進主体は国家機関や組織ではなく、その多くが営利企業としての「新聞社」「テレビ局」などのマスメディア(＝報道・言論・教育・娯楽機関)であり、また「百貨店」に代表される民間商業施設や地方公共施設としての博物館・美術館であった。この開催形態は、メディア本来が持つ報道や評価という世論に対する影響力発揮や経営面としての収益上昇や販売部数の拡大とともに、理念としての日中交流・国交回復への動機とも合致し、これらの展覧会の開催が実現し、また明治以降高まった国民の美術鑑賞への意識拡大の流れの中で、開催会場が持つ大衆性と利便性が相俟って大量動員に繋がった。一般的には参観者の多くの意識は、これまでに同様の形態で数多く催された西洋美術鑑賞と同様に「中国文物＝中国美術」への鑑賞者として認識をもって臨んでおり、出展作品そのものへの美的関心と感動を得て、中国文明への尊重・畏敬の念を抱くことに繋がっている。

思うに、展覧会催事を通じて日本文化の向上に大きく貢献した日本型の開催形態であるが、近年の百貨店の常設美術館の廃止、国公立博物館・美術館の独立法人化や指定管理者制度による効率運営の思考、マスメディアの利益追求、不況の長期化による企業広報予算削減、国際テロの頻発、日中関係の悪化などの状況は、今後の中国文物展の開催機会の減少や停止にもつながる要因であり、日本中国両国にとって文物という直接的視覚的な実物史料による受容と交流の機会を喪失することとなる恐れもあり憂慮に堪えない。日本・中国両国政府のみならず企業の社会貢献の視点からも、展覧会の実施の意義と開催への理解、さらには有効な支援が望まれるところである。

〔注〕

- (1) 『三国志』魏書東夷傳倭人条に、魏景初三(239)年に邪馬台国女王卑弥呼が魏に使者を派遣し、明帝より「銅鏡百枚」を授かり親魏倭王に任じたとする。そのためこの鏡の発見は、邪馬台国所在地の判明につながる。
- (2) 三種の神器は「八咫の鏡」「草薙の剣＝天叢雲の剣」「八咫瓊の勾玉」とされる。
- (3) 斉藤孝著『日本古代と唐風美術』(創元社、1978年5月) 5～23頁。
- (4) 玉生、鍛生、鑄生、細工生など学ぶべき技術分野により呼称されている。
- (5) 辻惟雄著「日本における中国美術」、蔡毅編『日本における中国伝統文化』所載(勉誠出版、2002年3月) 152～161頁。
- (6) 三善為康撰『朝野群載』巻一、『新訂増補国史大系』第29上巻(吉川弘文館、1938年)所載。総持寺鍾銘に912(延喜2)年の「入唐使」による白檀香木、千手観世音菩薩像の購入に関する記載がある。
皆川雅樹著「九世紀日本における「唐物」の史的意義」、『専修史学』第34号(2003年3月)所載、1～29頁。「唐物」の初見記事は『日本後記』延暦24(805)年7月27日条に「唐国物」の語、『続日本後記』承和6(839)年10月13日条に「唐物」の語が、遣唐使の関連記事として見られるとしている。
- (7) 陶磁器をはじめ、毛皮、香木、筆硯、紙、絹織物などの染織類の使用が今日に伝わる文芸作品に多く記載される。『源氏物語』末摘花には「御台秘色やうの唐土のものなれど」と、「秘色瓷＝ひそく」とよばれた越州窯青磁の使用が記載される。『うつほ物語』蔵開中巻には「黒豹の皮衣」国譲下巻には「瑠璃の壺」などの唐物が見られる。『枕草子』八八段には「めでたきもの唐錦。飾太刀。作り佛のもくゑ。」の記載がある。
- (8) 九州、瀬戸内、奈良・京都をはじめ福山市草戸千軒町遺跡や鎌倉西小路西遺跡(武家屋敷址)にみる青磁・青白磁の出土が特筆される。
- (9) 「金澤貞顕書状」神奈川県立金沢文庫保管(総数642通の書状が現存)武州金沢称名寺蔵。金沢(＝北条)貞顕(1278～1333年)は、鎌倉幕府第15代執権。金沢氏と菩提寺称名寺は、多数の唐物を輸入しその利益を鎌倉大仏などの寺社造営にあてる。『金澤文庫古文書(武将書状編)』(金澤文庫、1952年3月)五一 金澤貞顕書状より、18～19頁。

- (10) 吉田兼好著『徒然草』第百三十段。兼好自身は金沢文庫の充実に尽力した貞顕とは親しい間にあった。
- (11) 小野正敏著「2 舶来物への憧憬」、『東アジア中世街道』展図録所載 (毎日新聞社、2005年3月) 148～149頁。
瀬野精一郎著「鎌倉時代における渡唐船の遭難にみる得宗家貿易独占の一形態」、『日本古文書学論集5 中世I』所載、(吉川弘文館、1986年12月) 372～383頁。前田元重著「金沢文庫にみえる日元交通資料」同上書所載、384～397頁。
- (12) 『大日本史』巻三百三十二・食貨十五 (大日本雄弁会、1929年8月、319頁) では、後鳥羽天皇の健久四(1193)年の勅で宋銭の使用を禁止(『法曹至要抄』巻中)としているが、『法曹至要抄正解』(六合館・有斐閣・誠之堂、1901年11月、263～264頁)を見るに、延久四(1072)年七月四日の宣旨とし後三條帝のこととしている。いずれにせよ本勅には実際の効力は無く宋銭は使用された。現在でも日本各地で度々発掘されている。
- (13) 足利義政の東山殿をモデルとした將軍邸の室礼書である『君台観左右帳記』には、足利將軍家に使えた藝術家集団とも言える同胞衆により、宋・元期の中国画家の画題と等級やハレの場における唐物を中心とした飾りの規範、唐物の漆彫、陶磁器等の解説と等級が記載されており、その価値観と美意識が読み取れる。
- (14) 『太平記』巻第三十三の「公家武家栄枯易地事」に佐々木道誉(1296～1373)が催す茶の会に、その有様が記述される。
- (15) 秀吉による七箇条沙汰書によりその開催趣旨は明らかである。『群書類従』巻368飲食部5・北野大茶湯之記に記録される。
- (16) 『本朝見在書目録』とも言う。宮内省図書寮本を基にした『日本古典全集第二回・日本現在書目證注稿』(日本古典全集刊行会刊、昭和三年二月)の覆刻版(現代思潮社、昭和五十三年四月刊)に依る。
- (17) 張玉春著『《史記》版本研究』(商務印書館、2001年7月) 77～78頁。①『史記集解夏本紀』一卷・東洋文庫蔵(高山寺旧蔵)②『史記集解殷本紀』一卷・高山寺蔵③『史記集解周本紀』残巻・高山寺蔵④『史記集解秦本紀』一卷・東洋文庫蔵(高山寺旧蔵)⑤『史記集解高祖本紀』一卷・宮内庁書陵部蔵⑥『史記集解河渠書』残巻・神田文庫蔵、の6点である。
- (18) 国立民俗学博物館蔵の三史は、鎌倉期に渡来し、蔵印から月舟寿桂(1460-1533年)が所持し、京都妙心寺の禅僧南化玄與(1538-1604年)を経て、戦国武将直江兼継(1560-1619年)に譲られ、その後は主家の米沢藩上杉家に伝わり、上杉本または米沢版と呼ばれる。
- (19) 大庭脩著『江戸時代における中国文化受容の研究』(同朋舎、1984年6月) 201頁表7。
大庭脩著『漢籍輸入の文化史 聖徳太子から吉宗へ』(研文出版、1997年1月) 101頁。
その他、以下を参考にした。
大庭脩著『江戸時代における唐船持渡書の研究』(関西大学東西学術研究所、1967年3月)
巖紹蕩「日本における中国典籍」、蔡毅編『日本における中国伝統文化』(勉誠出版、2002年3月) 所載、112～126頁。
- (20) 『集古十種』全85冊から成る古宝物図録集。鐘銘・碑銘・兵器・銅器・楽器・文具・扁額・印

章・肖像・書画の10種1,859点の模写図・寸法・題記・所在を記載する。

- (21) 『防長古器考』長州藩七代藩主毛利重就の命により1769年から6年にわたって編纂された。周防・長門国内の二百余家に伝わる武具・染織・彫刻・文具・茶道具・絵画・書典籍・古文書など伝世する珍器・宝物を調査する。
- (22) 皆川淇園(1734～1807)京都生、儒学者、名は愿、字は伯恭。新書画展覽は、1792(寛政四)年に始まり約80年間継続、全国の書画作者を網羅した展覽と古美術の大衆市場を確立したといえる。
- (23) 瀬木慎一・桂木紫穂著『日本美術の社会史—縄文期から近代の市場へ—』(里文出版、2003年6月)303～316頁。
- (24) 明治期に日本美術の紹介に尽くした、フェノロサ(Ernest Francisco Fenollosa、1853～1908)と岡倉天心(1862～1913)訳出になると言われる。
- (25) 北澤憲昭著『眼の神殿「美術」受容史ノート』(美術出版社、1989年9月)140～145頁。
北澤憲昭著『境界の美術史「美術」形成ノート』(ブリュック、2005年7月)8～10頁。
「美術」の語は、1872年のウィーン万国博覧会に参加した際、ドイツ語の「Kunstgewerbe(=工藝美術) Museen(=博物館)」の翻訳による出品区分名称として初めて用いられた。この日本語「美術」は「西洋ニテ音楽、画学、像ヲ作ル術、詩学等ヲ美術ト云フ」として注釈され、諸藝術の意味を担った広義の範囲を指している。これに近い意味の言葉としては、それまでの「技藝」があるが、新たな西欧からの移植概念への対応として「美術」の新語が作り出された。
- (26) 北澤憲昭著『眼の神殿「美術」受容史ノート』(美術出版社、1989年9月)107頁。
北澤憲昭著『境界の美術史—「美術」形成史ノート [新装版]』(榊屋雲社、2005年7月新装版)7～10頁。
- (27) 大学は大学本校と称された機関。教育機関であると同時に教育行政官庁、文部省の前身。
- (28) 『東京国立博物館百年史』「大学献言、明治4(1871)年4月25日」(第一法規、1973年3月)37～40頁。
- (29) 鈴木廣之著『考古家たちの19世紀』(吉川弘文館、2003年10月)7～10頁。
明治4年5月23日太政官布告に、古器舊物保存方として「古器舊物ノ類ハ古今時勢ノ變遷制度風俗ノ沿革ヲ考證シ候為メ(中略)歴世蔵貯致シ古器舊物類(中略)官廳ヨリ可差出事」として、古器舊物を31品目に分類し指定している。
- (30) 明治5年文部省布達とし、「博覧会の旨趣ハ天造人工ノ別ナク宇内ノ産物ヲ蒐集シテ其名称ヲ正シ其用方ヲ辨シ人ノ知見ヲ広ムルニ在リ(略)」と有る。
- (31) 一例として、姫路酒井候は廃藩置県後の善後策として明治4年大阪伏見において81点の道具類を入札し、内16点のみを売却してその他を親引きとした。その中には定家・道風の色紙、雪舟の三幅などに並んで交趾香合・青磁箏花入などの唐物の存在が確認できる。
- (32) 木下直之著『美術という見世物』(筑摩書房、1999年6月)14～17頁、194～197頁。
- (33) 都守淳夫(1933年～)霊長類行動学者・動物心理学者。「猿猴捉月図」の時代変遷をテーマとして、売立目録から猿猴捉月図版を選出し、成句「猿猴捉月」の出典とその寓意変遷の書誌学

- 的研究から得られる推論を傍証する文化的資料として得るとの研究着眼から調査。『売立目録の書誌と全国所在一覧』(勉誠出版、2001年)
- (34) 小田部雄次著『家宝の行方 美術品が語る名家の明治・大正・昭和』(小学館、2004年11月) 37～65頁、135～137頁。
- (35) 山中商会主催、上野公園・第一会場日本美術協会・第二会場常盤華壇、11月27日売立。
- (36) 『美術商の百年 東京美術倶楽部百年史』(㈱東京美術倶楽部・東京美術商共同組合、2005年2月)を参考にした。
- (37) GHQ(米国占領軍)の要請により、1949年コロンビア大学カール・シャープを団長とする「日本税制使節団」の報告書をさす。経済・財政政策として導入され、今日に続く日本の戦後税制に大きな影響を与えた。直接税(特に所得税)中心、申告納税制度の課税体系が導入された。シャープ勧告の富裕税の創設趣旨については『シャープの税制勧告』(霞出版社、1985年9月)、105～116頁。
- (38) 三越、その前身の越後屋の創業は1673(延宝元)年であり、掛け値なしの現金販売で繁盛してきたが、1904年欧米式の百貨店へ脱皮した。京城・大連に出張所、大阪に支店を設け1907年には英国ハロッズデパートをモデルにルネッサンス式三階建ての新店舗を設けている。『三越のあゆみ』(㈱三越本部総務部、1954年11月)『株式会社三越100年の記録』(㈱三越、2005年5月)
- (39) 高島屋、1831(天保2)年創業し1898年大阪心齋橋筋に「京都たかしまや呉服店飯田新七大阪支店」を設けた。呉服染織に力を入れ、当時の日本画大家の協力を得た創作呉服で好評を得ている。1933年には東京日本橋に地下2階、地上8階建て店舗を新築開店。戦前の1922～38年の間には12件余の中国関連展覧会が開催されている。『高島屋百年史』(㈱高島屋本展、1941年3月)『高島屋135年史』(㈱高島屋、1968年9月)、『高島屋美術部八十年史』(㈱高島屋、1992年4月)
- (40) 阪急百貨店、1929年開業、1932年大阪古美術商10店参加(充美会と称す)の古美術品売り場を新設、同年「充美会主催古美術陳列即売会」を開催。百貨店で古美術扱いと正札販売の先駆けとなった。『株式会社阪急百貨店50年史』(㈱阪急百貨店、1998年4月)
- (41) 『東洋藝術展覧會』図録巻頭「東洋古美術の誇りは長い傳統と信仰の渾一された表現であります。(略)其の形式と文様に於いては世界最高のもので各国蒐集家が競うて珍重せられることは世人周知の事實です。(略)或は發掘品等一堂に集め只管御鑑賞を希ふ次第で有ります。(略)新荷着品はこれ以上の多数珍しき名品を蒐めてありますから……(略)」
- (42) 瀬木慎一・桂木紫穂著『日本美術の社会史—縄文期から近代の市場へ—』(里文出版、2003年6月)425～428頁。
清水久夫著「美術館の外部発注方式」、『アートマネジメント研究』第二号所載(美術史出版社、2001年11月)10～14頁。
- (43) 百貨店における展覧会開催の嚆矢としては、1904年開店早々の三越で開催の「光琳遺品展覧會」が挙げられる。
- (44) 浅野敬一郎著『戦後美術展略史 1945-1990』(求龍堂、1997年3月)、各章に分散所載する《日

本美術展の特異点』において新聞社・百貨店双方の状況を詳しく記述する。

河原啓子著「日本の新聞社主催展覧会におけるアートマネジメントの側面」、『アートマネジメント研究』第二号所載（美術史出版社、2001年11月）23～32頁。

- (45) 明治・大正期に制作された代表的美術品を一堂に集め、近代日本の新文化発達の経路を明らかにするとの開催趣旨。会期27間に178千余人が入場。朝日は、その収益金2万5千円を帝国美術院の明治・大正期美術史編纂事業に寄付した。
- (46) 天平元年から1200年を期し、天平文化の源泉を考究するとの目的。大阪での開催は、専門学者による講演会、朝日会館では、国宝22点をはじめとする彫刻・絵画・書籍・古裂などが展示された。
- (47) 『朝日新聞社史 大正・昭和戦前編』（朝日新聞社、1991年10月）290～291頁。
- (48) その他には全日本吹奏楽コンクール（39年より）全日本合唱コンクール（48年より）全日本おかあさんコーラス全国大会（78年より）朝日討論会（46～49年まで）その後の朝日スピーチコンテストでは、全日本高校英語弁論大会（62～92年まで）、仏語、ロシア語、中国語によるそれぞれのコンクールが開催されている。
- (49) 『朝日新聞社史 資料編』（朝日新聞社）、1995年1月）358～390頁。
- (50) その他には選抜高校野球、毎日藝術賞、毎日学術奨励賞、本因坊戦・王将戦、博覧会主催、都市対抗野球大会、毎日マラソン、毎日庭球選手権大会、全国高校ラグビー大会、全国高校サッカー選手権大会、全国学生相撲選手権大会など多彩な事業項目を主催する。
- (51) 『毎日新聞百年史』（毎日新聞社、1972年2月）544～572頁。
- (52) その他、音楽・舞台分野では、世界三大ジャズフェスティバルの一つと自称するセレクト・ライブ・アンダー・ザ・スカイの開催をはじめ、読売日本交響楽団を主宰する。スポーツ分野では、プロスポーツとして特筆される巨人軍の主宰をはじめ、東京箱根間往復大学駅伝、全日本少年サッカー大会、全日本バレーボール大会などを主催している。さらに読売三賞と称される日本学生科学賞（57年創設）全国小中学校作文コンクール（51年）高松宮杯全日本中学校英語弁論大会（49年）があげられる。
- (53) 『読売新聞80年史』（読売新聞社、1955年12月）629～634頁。
『読売新聞100年史』（読売新聞社、1976年11月）825～830頁。
『読売新聞100年史別冊 資料・年表』（読売新聞社、1976年11月）134～139頁。
『読売新聞120年史』（読売新聞社、1994年11月）247～248頁、573～580頁。
『読売新聞発展史』（読売新聞社史編集室、1987年11月）190～210頁。
- (54) 『日本経済新聞社120年史』（日本経済新聞社120年史編集委員会、1996年12月）529～538頁。
- (55) イギリス アシュモリアン、ビクトリア・アルバート。アメリカ ボストン、フォッグ、ブルックリン、ネルソンの各美術館、フランスギメ博物館よりの借用で構成。
- (56) 三越大阪店にて65年6月開催の「尾形光琳展」において100円の入場料を始めて設けた。
- (57) 浅野敬一郎著『戦後美術展略史 1945-1990』（求龍堂、1997年3月）17～234頁。
- (58) 浅野敬一郎著『戦後美術展略史 1945-1990』（求龍堂、1997年3月）332～333頁。
- (59) 新聞社・百貨店展覧会担当者による手記として以下の著作がある。

橋本喜三著『美術記者の京都』(朝日新聞社、1990年 9 月)

小林敦美著『展覧会の壁の穴』(日本エディタースクール出版部、1996年11月)

立石亥三美著『展覧会うらかたの記』(北辰堂、1995年 7 月)

野田泰道著『ザ・展覧会』(東方出版、1997年 4 月)

- (60) 1952年、当時のプリジストン社長の石橋正二郎氏が私財を提供し日本館を建築している。
- (61) 再び、石橋正二郎氏の12億円にもおよぶ私財の提供に頼っている。
- (62) 『中華人民共和国出土文物展』図録(朝日新聞社東京本社企画部、1973年)
- (63) 『中国秦・兵馬俑展』図録((財)大阪21世紀協会、1983年)
- (64) 『秦の始皇帝とその時代展』図録(日本放送協会・NHK プロモーション、1994年)
- (65) 『三星堆展』図録(朝日新聞社・テレビ朝日、1998年)
- (66) 『唐皇帝からの贈り物展』図録(新潟県立近代美術館・朝日新聞社・博報堂、1999年)
- (67) 『世界四大文明展・中国文明展』図録(日本放送協会・NHK プロモーション、2000年)
- (68) 『中国国宝展』図録(朝日新聞社、2004年 9 月)
- (69) 『愛・地球博グローバルハウス都市を築いた日 中国 china 文明の原点と展開』パンフレットより。

(おたべ ひでかつ 文学研究科東洋史学専攻博士後期課程)

(指導：清水 稔 教授)

2008年 9 月27日受理